





オオカミ陛下のお妃候補

里崎 雅

MIYABI SATOZAKI



ノーチエ文庫



登場人物紹介

ラウレンス

ステイーリン国の王。
ミアの兄。
冷たくプライドが
高い。

ジュリアンヌ

ブライルに匹敵する
大国の王女。
アイデンの妃候補。

ジロン伯爵

ラウレンスの
選んだ
ミアの婚約者。

ユーゴー

アイデンの側近。
王と国のためには
手段を選ばない
腹黒。

ノーラ

ブライルで
ミアに仕える侍女。

ピアンカ

ミアが幼い頃から
仕える侍女。

アイデン・ブライル

大国ブライルを繁栄させる
若き王。
魅力溢れる俺様。
周辺諸国から王妃候補の
女性を集めている。

ミア・ステイーリン

ステイーリン国の第5王女。
18歳。自立心旺盛で、
明るく前向きな少女。
正義感が強く、
やや直情型。

目次

才力カミ陛下のお妃候補

7

書き下ろし番外編

有能な侍女の想い人候補

369

才才カミ陛下のお妃候補

一 かけつぷち王女

こんなバカな話があったたまるものか。

ステイーリン国第五王女ミア・ステイーリンは、ドレスをたくし上げ荒々しく廊下を歩いてた。

神秘的な薄い灰色の瞳は怒りでゆらゆら揺れ、背中に垂らした見事な赤茶色の髪は波のようにうねっている。憤りに満ちたその様子は、世間で噂される「可憐なミア王女」の姿からはほど遠かったが、ミアとて、いつもこんな風に廊下を歩いているわけではない。ついさきほど知ったばかりのことに怒りが抑えきれず、なりふり構ってられないのだ。

「お、お待ちください姫様〜!」

小さな頃からミアに仕えている侍女のピアンカが、必死の形相で追いかけてくる。が、彼女を待ってられないくらい、ミアは頭にきていた。

(いくらお兄様が国王だからって、こんなありえないわ!)

目を通したばかりの手紙を、手の中でぐしゃりと握りつぶす。

手紙の差出人は、ステイーリンの有力貴族であるジロン伯爵。

五十代半ばくらいのジロン伯爵は、見事なまでに禿げ上がった頭部と真っ白な顎髭のせいで、年齢よりも随分年上に見える。それでいて、目は異様なまでにギラギラと血走り生気に溢れている、率直に言って「気持ち悪い」男だった。

ジロン伯爵は若い頃に一人目の妻を亡くして以降、金に物を言わせて次々と若い女性を妻にしては、離縁を繰り返している。その理由を「子を産まないから」と一方的に女性のせいになっているが、実際は彼に子種がないのだからと社交界ではもっぱらの噂だった。

そのジロン伯爵が突然、ミアに「未来の我が妻、ミア」という書き出しの手紙を寄越したのだ。

有力貴族とはいえ、一伯爵が王女であるミアに対して敬称もつけず、さらには「妻」と呼ぶなんて無礼極まりない。

伯爵が突然こんな手紙を寄越してくることに、思い当たる原因はたった一つだ。

「お兄様!」

大きな音を立て王の執務室の扉を開けると、中にいた大臣がぎよつとした様子で振り返った。

「ミ、ミア王女！ ノックもせずいきなり入室してくるなど、なんてはしたない……」

「緊急の用件よ」

ミアは大臣をひと睨みして黙らせると、兄のラウレンスが座る机に歩み寄りパンツと手をついた。はずみで、ラウレンスの細くうねった金色の髪が僅かに揺れる。

「お兄様、一体これはどういうことですか？」

くしゃくしゃになった手紙を兄の前に広げて見せる。

しかしラウレンスは感情の宿らない目で手紙を一瞥し、すつと手でそれを払いのけた。

「お前宛ての恋文だろう。それがどうした」

「よくご覧になってください！ ここに『未来の妻』と書かれています。王女である私に一貴族がこのような手紙を送りつけるなど、許される行いではありません。お兄様、ジロン伯爵と何を約束なさったのですか？」

「へ、陛下。まさか、まだミア王女に何もお話になっていなかったのですか？」

傍らに控えていた大臣が驚いたように声を上げた。だが、ラウレンスにはさして焦った様子もない。

「王女として生まれたからには、国のために嫁ぐのは当然の義務。その決定権を持つのは、王である私だ。既に決まっていることに、この者の意見など必要なかろう」

あまりの言いぐさに、ミアはギリリと奥歯を噛みしめた。

いつもこうだ。兄にミアの主張が通った試しなど一度もない。ミアだけでなく、四人いる姉たち皆そうだった。何も言えず、兄の命令通りに嫁がされていった。想いの通じ合った恋人がいようと、相手が十五も年下の子供であろうとも。

兄妹と言えど、自分たちは兄にとって単なる駒でしかないのだ。

ミアは深呼吸を一つすると、静かにラウレンスを見つめた。

「お言葉ですがお兄様。私とて、王族の義務については充分理解しております。国のために嫁ぐのが嫌だと言っているわけではありません。その相手がジロン伯爵というのが納得いかないのです。なぜあのお方なのか、説明してくださいませ」

王家の基盤を強堅にするため、国内の有力貴族のもとへ嫁ぐというのは理解できる。しかしその相手がジロン伯爵なのはなぜか。金に物を言わせて妻を取っ替え引っ替えする、品位のかけらもないような男だ。彼を王族の親類にするなんて、気が触れているとしか思えない。

王家にとって有益な貴族は他にもたくさんいる。姉たちが全て嫁ぎ王家で唯一の王女

となったミアには、他にもいくつか縁談が持ち込まれていたはずだ。

「ジロン伯爵は、愛国心に満ちた素晴らしい男だ。それは、王家への献金にも表れている。地位はやや低いのが、釣り合いが取れぬというほどでもない」

「お兄様……ご存じですよよね？ ジロン伯爵が裏で違法な取引に手を染めているという話。大臣からの申告で、調査に乗り出す予定だと聞いていましたが、それはどうなっているのです？」

ミアの言葉に、ラウレンスは端整な顔を不快そうにしかめた。

「……どうしてお前がそんな話を知っているのだ」

兄の追及に、ミアは無言を通した。兄の政治手腕を疑い侍女に内情を探らせていたなんて、バレたら何をされるかわからない。

「女が政に口を出すなど百年早い。我が妹ながら、その我儘ぶりは目に余る。嫁いだ後、しっかりとジロン伯爵に馴れてもらわねばならん」

ラウレンスはミアの反論など物ともせず、ふんと鼻を鳴らした。

「お前にできることなど、王家のために嫁いでいくことだけだ。生意気な口を利く暇があったら、ジロン伯爵に気に入ってもらえるかどうかを心配している」

先月、兄の誕生祝いのパーティーで目にしたジロン伯爵を思い出し、ミアは盛大に顔

をしかめた。全身を舐め回すような伯爵のいやらしい視線。あの時には既に、ミアとジロン伯爵の縁組が進んでいたのだと、今さらのように思い知る。

「……ジロン伯爵の要望は、私と結婚して王家と縁を繋ぐことだけですか？」

社交界の噂が本当なら、跡継ぎを得られない伯爵は王家と縁を繋いだとしても一代限りだ。跡を継がせる相手もないのに、そうまでしてミアを娶りたい理由が思い当たらなかつた。

「ジロン伯爵の没後、彼の亡骸を王家の墓に入れる約束をしている」

「……はっ？」

驚きのあまり、ミアの声が裏返った。

王家の墓には、代々王族しか入ることが許されていない。たとえ王女であろうとも、一度嫁げば姓が変わるため入れないくらいだ。

「あの男も自分の没後を憂う年になったということだ。自分の代で途絶えてしまう墓よりも永く手厚く葬られる墓に入りたいと申すので、その願いはミアの夫となれば叶うと助言してやったのだ」

王族のみを申う神聖な場所。そこにジロン伯爵を入れるというのか。

「あ、ありません！ ジロン伯爵は王族でもないのに、お父様とお母様と同じ墓に入

れるおつもりですか？」

「死んだ後の弔い方など、大した問題ではない。それより、お前の支度金はずんでもらう手筈を整えた方が有益だろう。ああ、そうだ。伯爵が死んだら彼の領地や資産をお前が継承できるよう、しっかり手続きを取らねばな」

目先の利益のために父と母をはじめとする王家の者が眠る大事な場所を汚そうとしているラウレンスに、ミアは言葉を失った。

明確な証拠こそ掴ませていないものの、伯爵は裏で悪事に手を染めていると噂のある者だ。そんな人間を神聖な王家の墓へ入れるなんて、ミアには到底受け入れられなかった。死後の約束とはいえ、このままではジロン伯爵に王族並みの権利を与えてしまうことになる。

（あんな私欲にまみれたエロジジイにそんな権利を与えるわけにはいかないわ。どんな手を使ってでも、絶対に阻止しなきゃ——！）

兄がやろうとしていることは王家に対する冒涇だ。王女として、絶対に認められない。とはいえ、ミア一人ではあまりに非力すぎる。自分の無力さを悔しく思いながら、何か打つ手はないかと必死に頭を動かしていた時、慌てた様子の家臣が執務室に入ってきた。

「た、大変です陛下。ブライル国より、書状が届きました！」

「ブライル国だと？ 大陸の遙か西の、あのブライル国か？」

滅多なことでは顔色を変えないラウレンスの表情が、一瞬強張ったように見えた。

ブライル国とは大陸屈指の大国だ。位置的にはかなり離れているが、その繁栄ぶりと国力はこの国まで聞こえてくる。そんな大国から、国交のほぼない小国のステイリーンに書状がくるのはかなり珍しいことだ。

「はい。陛下宛てではありませんが……内容は、どうやらミア王女様に関するかと」「え？ 私？」

突然自分の名前が出てきて、ミアはきょとんとした。

家臣が差し出した書状を受け取ったラウレンスは、それを広げてさっと目を走らせた。しばらくして顔を上げると、緊張で身体を硬くしたミアを見やり、薄気味の悪い笑みを浮かべる。

「面白い書状がきたぞ、ミア」

いきなり優し気な口調で名前を呼ばれ、ぞぞっと総毛立った。

「……なんでしょう、お兄様」

「ブライル国の王が、お前にチャンスをくれるそうだ」

「チャンス？」

訳がわからず、ミアは眉根を寄せた。ブライル国の王と言えば、ラウレンス同様、先王の死によって王位に就いたまだ若い王だったはずだ。代替わりしてからも国内の情勢は安定している上にさらなる発展を続けていると聞き、兄とは大違いだと密かに思ったのを覚えている。

そんな大国の王が、ミアに一体どんな用事があるというのだろうか。

「王妃候補として、ブライルへ来る機会を与えてくれるそうさ。そこで王に気に入られれば王妃にしてやるだ……ふん、笑わせてくれる」

そう言うと、ラウレンスは乱暴に手紙を放って寄越した。慌ててそれを受け取ったミアは、詳しい内容を見て目が点になった。

「その気があるならブライルを訪れていただき、王が認めた暁には王妃に……って、なれるかどうかはわからないけど、とりあえず王妃候補として顔を見せにこい……ってこと？」

いくら大陸屈指の大国とはいえ、失礼にもほどがある。即座に手紙をラウレンスに突っ返そうとして、ミアははたと動きを止めた。

この話を受けたら、ジロン伯爵との縁談を一時保留にできないのではないか。

いくら豊富な資産を持つ有力貴族といえども、大陸屈指の大国とは比べるまでもない。国にとつてどちらが有益かは、一目瞭然だ。

しかし、いくら口約束とはいえ既にジロン伯爵とミアの縁組は進んでいる。それを覆すには、この無謀な話に乗ることしかミアには思いつかなかった。

迷ってる暇はない。ミアは勢いよく執務机に手をつきラウレンスの方へ身を乗り出した。

「私、ブライルの王妃になってみせますわ。絶対に、国王を落としてみせます！ ですからお兄様、この話を受けてください！」

ラウレンスはミアを見据え眉をひそめた。おそらく兄には、ミアの考えなどお見通しだろう。

「お前にできるわけがない。経費の無駄だ」

「極力お金はかけませんわ！ 新しいドレスもいりませんし、連れていく侍女も一人で結構です」

このチャンスを逃してなるものかと、必死に食い下がる。

「お兄様、冷静にお考えになってくださいませ。私がブライルへ嫁ぐことができれば、あの大国と強固な繋がりができます。きっと支度金だってジロン伯爵の比ではありません

ん。産業の盛んなブライルから、特産品を仕入れて周辺国に販売することだってできるかも！」

そんな確約などもちろんないが、ほんの少しでも兄の気持ちを動かせたら充分だ。「自国の一伯爵でしかないジロン伯爵と、大陸屈指の強国ブライルの王。どちらに嫁ぐのが国にとって利があるか、賢いお兄様ならすぐにわかりますよね？」

兄がこの話に乗るかどうかは五分五分だ。十秒ほど焦らされた後、兄はにやりと口角を上げた。

「面白い。いいだろう。それではミア、ただちに支度を整えブライルに向かえ。ジロン伯爵には私から話しておこう。しかし対外的にはあくまで『外交のため』だ。王女が品定めされるために自ら訪問するなど、周辺国に知られるわけにはいかないからな」
相変わらずブライドの高い兄に辟易しつつも、ミアは神妙な態度で頷いた。せつかくラウレンスがその気になっているのに、余計な水を差してはならない。

「しかし……気が強く我慢のきかないお前を、ブライルの王が妻に望むなどありえるのか？ お前の取り得は、少々外見が良いくらいのものだろうか」

ラウレンスが嫌味たつぷりに言い放った。

血を分けた妹なのに、たとえ気休めでも『お前の力で王妃の座を勝ち取れ』と励ませ

ないものかとかがつくりする。しかしミアは、なんとか心を奮い立たせた。

そうでなくてもがけつぷちなのだ。ここで踏ん張らなければ、兄はほれ見たことかとかばかりにミアをあのジジイ伯爵に嫁がせるだろう。間髪を容れず、居丈高に。

ミアは唇を噛みしめて顔を上げると、父の面影を色濃く宿す兄の顔を睨みつけるようにして決意を固めた。

「ご心配は無用です。必ずブライルの国王を落としてみせます！」

なんとしてもやり遂げてみせる。今ミアができることは、これしかないのだから。

頬を上気させ瞳を輝かせるミアに顔をしかめつつも、ラウレンスは淡々とブライル国を訪問する許可を出したのだった。

二 最悪の国王

兄に啖呵を切った日から約一ヶ月半後。

ミアは付き人として侍女のビアンカ一人を連れ、質素な馬車にゴトゴト揺られていた。旅用のドレスも、素材で地味なデザインのものである。今の自分はとても王女には見えな

いだらうが、ミアに不満はなかった。

馬車の後ろに積んだ木箱は僅かに二つで、最低限の荷物しかない。ブライルの王に謁見する際に身につけるドレスやアクセサリーも、母や姉たちから譲り受けたいわゆる「お古」だ。

父亡き後、ステイリーン国王となった兄のラウレンス。父の死が突然だっただけに、国内の情勢は未だ落ち着いていない。そんな国の現状を思えば新しいドレスを仕立てる余裕はないし、無理に見栄を張ったところでメッキはすぐに剥がれてしまう。

それに、どんなに質素な旅であっても国をほとんど出たことのないミアには、全てが新鮮で楽しい経験だった。

「さすがに一ヶ月以上も旅を続けていると、少々飽きてきますね」

ミアの向かい側に座るビアンカが、欠伸をしながら話しかけてきた。

「そう？ 楽しくて全然飽きないわよ。考えることもたくさんあるし」

「ミア様は、またあの書状をご覧になってるんですか？」

「だって、見れば見るほどこの書状怪しいんだもの」

ミアは膝の上に置いていた書状をパラパラと広げた。旅の合間に何度も読み返している書状には、間違いないミアに王妃候補としてブライルを訪問してほしいという内容が

記されている。が、実感はあまりない。

出立前に急いでかき集めた情報では、どうやらブライル国内はおろか周辺国の目ぼしい令嬢たちまでもが既に王妃候補として集められ、国王のお手つきになった後、送り返されているという噂だ。それが本当なら、ブライル国王はジョン伯爵と大して変わらないうろくでもない女好きと言えよう。

「怪しいですけど……偉い人の考えることは、私みたいな侍女にはわかりかねますから」
ビアンカがわざとらしく肩をすくめる。そのおどけた動作にミアもくすりと笑った。

二つ年上の彼女は、ミアが十歳になった頃に専属の侍女となった。年が近いせいか馬が合ったこともあり、侍女でありながら友達のような関係が続いている。

侍女を一人だけ連れていくと宣言したミアが、真つ先に思い浮かべたのはビアンカだ。断られても仕方ないと思っていたが、彼女は快くミアに同行してくれた。

気心の知れた彼女がついてきてくれたのは心強いが、だからといって不安がなくなるわけもない。

「私はてっきり、ミア様が喜んでこの話に乗ったのかと思っておりました。こう言っただけなんです、あのジジイ伯爵の五番目の奥方になるよりも、ずっとマシなお話じゃないですか」

「それはまあ、そうなんだけど」

つるつるの額を光らせて迫るジロン伯爵の顔が浮かび、ミアは思わずウツと吐き気を催す。

「あら、馬車酔いですか？ 大丈夫ですかミア様」

「……大丈夫よ」

軽く首を振って脳裏に浮かんだ映像を追い出し、ミアはため息を吐いた。

啖呵を切つて国を出てきた以上、確実に成果を上げなければならぬのに、どうにも自信が持てないのだ。

「自信をお持ちくださいませ、ミア様」

ピアンカは、ミアに柔らかな笑みを向けた。

「ミア様は黙っていればとてもお綺麗ですよ。赤味がかつた美しい髪も、夜明けの空のような灰色の瞳も。お肌も真っ白とまでは言えないですが、モチモチして手触りがとってもいいし」

「黙っていればはともかく……慰めてくれてありがとう。そう言ってくれるのはピアンカだけよ」

母国ステイリーンでは赤茶の髪も灰色の瞳も、どちらかというとき蔑みの対象だった。

さすがに王女を表立って批判する者はいなかったが、陰で色々言われていたのは知っている。自分も姉たちのように黄金色の髪や緑色の瞳だったらよかつたのにと何度恨めしく思ったかわからない。

この外見で気に入ってもらうのは難しいだろう。かといって自分の内面に自信があるかという、さらに微妙な問題だ。

「さきほど従者に確認したら、あと一週間もすればブライル国内に入るそうですよ。この辛い馬車生活も、もう少しの辛抱です」

ミアを元気づけようとしてか、ピアンカが朗らかに笑いかけてきた。

それに微笑み返し、ミアは窓の外に目を向ける。具体的な期限を知らされたことで、むしろ緊張が高まってきた。

自分が呼ばれたのはあくまで「王妃候補」であつて「王妃」ではない。気に入ってもらえなければ、即刻、国に帰されてしまう。

ブライルまであと一週間。今さらこんな場所でミアができることなど何もないのに、気持ちばかりが焦る。

——私は、何がなんでもブライル国王を陥落させなければならぬのよ。

ミアは静かに瞼を閉じ、千々に乱れる心を静めて自らの決意を反芻していた。

それから約一週間馬車に揺られ、ミアとビアンカはようやくブライルに入国した。

中心部へ近づくにつれ、段々街並みが華やかになる。見たことのない上着を身につけた民の姿を、ミアは窓から顔を出して興味津々に見つめた。女性は頭に色鮮やかな布を巻き付けている者が多い。神秘的で美しく、何より異国情緒たっぶりの景色に胸が躍る。王都に入るとすぐに、中心部にそびえ立つ巨大な城の姿が見えた。それは、活気のある城下街と溶け合い、なんとも美しい光景だった。

「はああ……それにしても、大きな城ですね。こんな遠くからでも見えるなんて、ステイーリンの何倍あるんでしょうかねえ」

馬車の窓から顔を覗かせ、ビアンカがほうつと感嘆の息を吐く。

「そりゃあ、天下のブライル国ですもの。ステイーリンと比べては失礼にあたるわ」

平静を装い答えたものの、ミア自身も正直この国の広さと栄えた様子には驚きを隠せないでいた。外交の経験はないに等しいが、この国が桁はずれに栄えていることはわかる。

「ミア様……そんな格好のまま、お城に向かわれて大丈夫ですかねえ？　こんな大きな国なんですよ。失礼にあたるんじゃないですか？」

華やかとはとても言い難い旅用のドレスを着たミアを見て、ビアンカが不安そうに言

い始めた。

「いくらなんでも、この格好で陛下に謁見しようなんて思っていないから大丈夫よ。とりあえず中に通してもらって、着替えさせてもらえばいいんじゃない？」

お城に上がる前に、どこか宿を取って身なりを整えてから行けばいいのかもしれないが、なんせこちらには時間もお金もない。それなら空き部屋の一つでも借りて着替えさせてもらった方が経済的だ。

ようやく城の門までたどり着き書状を見せ中に入れてもらう。が、敷地に入っても大すぎてなかなか城に近づくかない。ミアは次第に、自分が途方もないことに挑んでいるような気持ちになってきた。

こんな城に住む国王の妃が、自分に務まるのだろうか。そもそもなんの取り柄もない自分を王妃にしてもらおうだなんて、おこがましくはないだろうか。

早くもくじけそうになる気持ちを、首をぶんぶん振りなんとか奮い立たせる。

挑戦する前から怖気づいていては、何も始まらない。ここで王妃の座を手に入れられなかつたら、ミアは国に戻って強欲なエロ伯爵の五番目の妻になる他ないのだ。

さらにミアの輿入れが正式に決まれば、王族でもないあの男が両親の眠る王家の墓に入るようになってしまう。なんととしてもその事態は避けたい。

「到着したようです、ミア様。いよいよですね」

ピアンカの囁きに顔を上げると、緩やかに馬車の速度が落ち静かに止まった。
 (ここからが勝負よ)

ミアは覚悟を決め馬車を降り、大理石の敷き詰められた廊下に力強く一歩を踏み出した。

城の入り口でステイリーンから来たと告げると、使用人は戸惑った表情でミアとピアンカを見比べた。

「ええと、その……ミア王女というのは、どちらが……？」

言いくそように尋ねられ、慌てたのはミアではなくピアンカの方だった。

「私はミア王女の侍女です！ ミア王女はこちらですわ」

「し、失礼いたしました！」

使用人は慌ててミアに向かつて深く頭を下げる。

「こんな格好でしたら、どちらが王女かなんてわからなくて当然だわ。お気になさらないで」

「ミア様、そんなこと仰ってはなりません！」

ピアンカはあっけらかんとしたミアにため息を吐きつつ、使用人に向かつて言った。

「……国王陛下にお会いする前に、支度を整えたいのでお部屋をお借りすることはできませんか？」

「かしこまりました。それではご案内できる部屋を確認してまいりますので、しばらくお待ちいただけますか？」

「ええ。それではここでお待ちしております。ご無理を言って申し訳ありません」

ピアンカが深々と頭を下げると、使用人は顎に手を当て何やら思案顔になった。

「実は謁見をお待ちの他のご令嬢方も、この先にある広間にいらっしゃいます。そちらでお待ちいただくのがいいとは思いますが……うーん、でもなあ……」

使用人はちらりとミアに視線を走らせ微妙な表情を浮かべている。しかしミアは「他のご令嬢方」という言葉に気を取られていた。

(やっぱり、私の他にも呼び寄せられた方がいるのね……)

これは一筋縄ではいかなさうだと気を引き締める。一体どんな令嬢たちが集められているのか、確認しておいた方がいいかもしれない。

「わかりました。そういう場所があるのでしたら、私たちはそちらで待たせていただきますね」

ピアンカに代わりそう答え、さつさと歩きます。

「あ、いや、その、あー……ま、いいのかなあ？」

使用人はなおも迷っている様子だったが、それには振り返らずに廊下を進んだ。

「なんなんでしょう？　なんだか様子が変でしたけど」

「急に支度部屋を用意してほしいなんて無理を言ったから、困っているのかもしれないわ。本来待つべき場所があるなら、そちらで待たせていただきますよ」

「やっぱり費用をケチったりしないで、城下街で宿を取ってお仕度を整えるべきでしたかねえ」

そんな雑談を交わしながら二人は教えられた広間にたどり着く。そして、怪訝けげんそうな表情をした衛兵が開いた扉の向こうの光景に、目を見張った。

豪華ごうか絢爛けんらんな広間の大きなテーブルには、飲み物やお菓子がふんだんに用意されている。そしてその周囲では、大勢の令嬢たちが微笑を浮かべながら椅子に腰掛け談笑していた。

彼女たちは皆、美しく豪華なドレスに身を包み、煌びやかな宝石で飾り立てている。遠目からでも高貴な身分の女性ばかりというのが、一目瞭然いちりょうぜんだ。

呆気にとられる二人に気づいた令嬢たちが、怪訝けげんそうに眉をひそめこちらに視線を送ってくる。

「あら？　また誰かいらっしやったのかしら」

「違いますわよ。あの格好を見てごらんなさい。どこかの侍女まきが紛れ込んできたのでしょうか」

どうやらご令嬢たちは、ピアンカだけではなくミアのことも侍女だと思っただけで城の使用人にも間違われたくらいなのだから仕方ない。

そんなことよりも、この光景——王妃候補として女性を集めては手をつけ送り返しているという噂が、一気に現実味を帯びてくる。しかもこの人数だ。予想を遙はるかに超えた令嬢の数に、ミアは軽いめまいすら覚えた。

「……驚いたわね。どうやらブライル国の王は噂通りの人みたい」

兄のような人だったら嫌だなあと思っていたが、それ以上に難ありの人物かもしれない。会う前からキライになつてはまずいのに、うつつすらと嫌悪感が湧く。

「こんなにたくさんの方々が待っているのなら、私の番が回ってくるのなんて夜が更ふけからになるんじゃない？　明日になる可能性もあるわね……」

「そうになると、今夜の宿の心配もしなくてはならないですね」

「あら。それくらいはこちらでなんとかしてもらいましょよ」

二人でひそひそ話し合っていると、視界の端で一人の令嬢がパチンと扇あふぎを閉じた。

「ちよつとあなたたち！」

声のした方に目をやると、濃いピンク色の派手なドレスに身を包んだ女性が扇おうちでびしつとミアとピアノカを指している。ミアは人違いかと思ひ辺りをキョロキョロと見渡してみたが、彼女の持つ扇おうちの先には自分たちしかない。

「もしかして、今呼ばれたのつて私たちかしら」

ピアノカと顔を見合わせる。ミアは首を傾むげながらピンク色のドレスを着た令嬢に声をかけた。

「私たちに何か御用ですか？」

「飲み物がなくなつてしまったの。お茶を飲みたいから、早く用意して」

そんなこともわからないのかと言わんばかりの表情で、令嬢はふんつと鼻を鳴らす。

嗚然として広間を見渡すと、なぜだか使用人や侍女が一人もいない。自分の高い女性の傍には必ず侍女が控えているものだが、あえて離されているのだろうか。

質素な身なりをしているとはいへ、ミアはれつきとした王女だ。さすがに見知らぬ女性の給仕をする気にはなれなかつたし、部屋が整えば着替えにも行かなければならない。答えに詰まつていると、令嬢はさらに忌々いまいましげにミアを睨にらみつけてきた。

「ちよつと、アナタに言つてるのよ。どこの国の使用人か知らないけれどグズね。この

わたくしが、飲み物がないと言つているのよ。すぐに用意なさい！」

彼女たちの座るテーブルの上には、飲み物や食べ物が大量に用意されている。立ち上がつて手を伸ばせば、すぐにでもジュースの入つたピッチャーが取れる距離だ。ジュースが嫌なら自分でお茶を淹いれるしかないが、茶葉やティーポットもきちんと用意されている。たとえ普段は侍女にお茶を淹いれさせていたとしても、この場は自分で淹いれればいだけの話だ。

ステイリンでは、大切な客人は自らお茶を淹いれてもてなすのが礼儀の一つだ。各地の色々な茶葉を取り寄せて試飲するのが趣味でもあつたミアには、お茶の用意などわけではない。けれども、いくら外交経験が少なくてもミアが彼女に従うのはよくないとわかる。「お茶はテーブルの上に用意されていますよ。淹いれ方がわからなければ、お教えしましょうか？」

そう返したミアの言葉に、令嬢の顔がかつと赤く染まつた。

「使用人のくせに、口答えをするつもり!? わたくしはイリーネ産のお茶しか飲まないのよ。早くイリーネの茶葉を探してお茶を淹いれなさい。こんなところに最初から用意されている飲み物なんて、気安く口にできないわ」

(こんなところについて……)

自分が嫁ぐかもしれない国のもてなしに対して、随分な言いようだとミアは眉をひそめる。周囲の幾人かの令嬢も同じ感想を抱いたようで若干表情をこわばらせた。だが、関わるつもりがないのか皆知らんぷりを決め込んでいる。

「お言葉ですが……ブライル国が厚意で用意してくださったものに対して『こんなところに用意されている』とは失礼じゃないかしら」

つい思ったまま言い返すと、令嬢の目が吊り上がった。

「わたくしに意見をするつもり？」

「ええ。それがあなたのためにもなると思っていますし。ちなみにイリーネ産の茶葉でしたら、あなたの目の前にあるガラスの器に入っているのがそうですよ」

イリーネ産の特徴ある茶葉を見分けることもできずに、そのお茶しか飲まないとは滑稽にもほどがある。やや呆れ気味に言ったミアの言葉に、周囲のご令嬢たちが顔を見合わせてくすくすと笑いだした。退屈しているのか、楽しげにやりとりを盗み見されている。

「あ、あなた……使用人のくせにとんだ無礼者ね。よくもわたくしに対してそんな口が利けたものだわ！　どこの国の者か言いなさい！」

周囲に笑われているのに気づいた令嬢が立ち上がり、激しい口調でミアを指さした。マズイと思ったのか前へ出ようとしたミアンカを手で制し、ミアは静かに告げる。

「私はステイリン国の者です」

「ステイリン？　聞いたことがないわね。どこの田舎者よ」

ステイリンはこのブライルより遙か東に位置している小国だ。知らなくても仕方ないと思う一方、端からこちらを見下してくる令嬢に少々呆れた。

（一応大陸続きだし、世界会議にも出席している国なんだけど）

大陸に名を馳せるブライル国の王妃になるつもりなら、他国の知識も多少は必要だ。国名すら知らないというのは、問題があるのではなからうか。

「名前も知られていないような小国が、なんの用？　まさかノコノコと王妃にしてみらおうと思っただけののだとしたら、身の程を知らなすぎね。あなたの主人はどこにいるのかしら」

あからさまな蔑みの言葉に、ミアは眉をひそめた。

目の前のこの令嬢がどんな身分かは知らないが、さすがにここまで言われて黙っているミアではない。言い返してやろうと大きく息を吸い込んだところで、ぐいっと後ろに腕を引かれた。ミアンカだ。

「ミア様、余計な争いはダメです！」

「でもミアンカ、ここまで言われて黙って引き下がるのは……」

「謁見前に他国のご令嬢とひと悶着起こして問題にでもなったら、元も子もありませぬ！」

ビアンカは黙り込んだミアの腕をさらに強く引つ張り、何事かと怪訝そうな顔をしている令嬢を残して広間から退散してしまった。閉めたドアの向こうからは、何やらわめく声が聞こえてくる。

「言われっぱなしで引き下がっては負け戦じゃないの」

「何が負け戦ですか。正義感が強いのは悪いことではありませんけど、時と場合によります。ミア様、ご自分がなんのためにブライル国にいらっしゃったのかお忘れですか？」

真剣な彼女の表情を見て、はたと思ひ出す。

そうだった。こんなところで見ず知らずの令嬢と諍いを起こしている場合ではなかった。

「どうぞ冷静になってくださいませ」

ミアを軽く窘めつつ、ビアンカはきよろきよろと辺りを見渡した。

「ちよっと私、さきほどの方に部屋の用意ができたか聞いてまいります。ミア様は絶対にここから動かないでくださいね！」

ビアンカはそう言うと、元来た通路を走っていった。

しよんぼりと項垂れながら、ミアは通路に置かれていた鉢に軽く腰掛けた。ビアンカの言う通りだ。ここに来た目的を忘れ、異国の令嬢をやり込めてやろうなど考えが足りなすぎる。つい感情のままに行動してしまう自分の性格が情けない。

反省してしばらくじっとしていたが、ふと垣根の向こうに美しい中庭があるのを見つけてしまった。途端に、好奇心がむくむくと首をもたげる。

（気分転換に……ちよっとだけ散歩させてもらおうかしら）

あれだけたくさん女性の女性たちが待っているのだから、ミアが国王陛下に会えるのは相当先のはず。

焦る必要はない。そう考えたミアは、ふらりと中庭へ抜ける道を探して歩き始めた。

城の前庭に負けず劣らず、この中庭も手入れが行き届いてかなり立派だ。ステイリーンと気候の差があまりないせいとか、咲いている花や草木に見慣れた物が多く感じる。美しくも親しみのある庭にほっと表情を緩めながら芝の上を歩き進めると、小さな噴水のある広場に出た。

「わあ。ここ、なんだか秘密の隠れ家みたい」

ちろちろと水の流れる噴水の周りには、淡い色で統一された花が咲き乱れていた。整然とした花壇ではないが、訪れる者の心を落ち着かせる温かさがある。

(少し、休ませてもらう)

石造りの噴水に腰掛け、手を伸ばして水をすくう。冷たい水をびちゃびちゃと手で弄もてあそびながら、ふとこの中に足を沈めたいという欲求にかられた。長旅で馬車にずっと揺られていたせいか、脚がむくんで火照ほてっているのだ。行儀は悪いが、今なら誰も見ていない。

(ちよつと足を冷やすくらい、いいわよね。誰もいないんだし)

少しの間だけと自分に言い訳して、ミアは編み上げ靴の紐ひもをずると解いた。靴下も脱ぎ捨て素足になると、スカートをたくし上げ噴水の縁に腰を下ろし、水に足を浸ひたす。

「あ、冷たい……」

噴水の水はかなり温度が低かったが、その冷たさが逆に心地好く感じられた。最初は足首まで水に浸ひたしていたのが、ついはずみで膝まで水の中に入れてしまう。慌ててドレスのスカートをたくし上げ、ふーっと息を吐いた。

澄んだ水の中で、ミアの白い脚がゆらゆらと揺れている。段々脚の火照ほてりが治まってきてふるりと身震いしていると、ふいに後ろで物音がした。

「だ、誰!？」

慌てて振り向くと、噴水の脇に置かれていたベンチからむくりと人影が身体を起こし

た。気配をまったく感じなかったせいで、誰もいないと思ひ込んでいた。

「誰、とはこつちのセリフだ。王家所有の庭で、随分と度胸のある娘だな」

咎とがめるような男の低い声に、ミアはハッと立ち上がった。ここはブライルの王宮だ。

考えてみたら、自分は中庭に無断で侵入したどころか勝手に水浴びまでしてしまっている。

青くなり立ち尽くすミアを見やり、男はくあつと大きな欠伸あくびをした。

気意けいそうに真つ黒な前髪を手で払うと、端麗な顔立ちと明るい琥珀色の瞳が見える。

高い鼻がすつと通り、野性的でありながら洗練された雰囲気つらの青年だ。不愛想なしかめ面つらをしていても、どこことなく気品けいひんのようなものを感じる。ミアは言葉も忘れ呆然とその男を見つめていた。

「どうした、女。言葉が通じないのか?」

太腿までスカートをたくし上げたあられもない姿で立ち尽くすミアを、男は面白そうに見つめている。その視線の先が自分の脚に注そそがれているのに気づいて、ミアは慌てて噴水の縁に座った。

「ちよつ……み、見ないで!」

「見たくて見ているわけではない。そっちが勝手に見せているのだろう」

「そ、それはそうなんだけどっ」

さきほどまでは心地好かった冷たさが、長時間浸^{ひた}っているうちに辛くなってくる。そんなミアの状況を見透^{みす}かしたように、男はくつくつと笑いながら言った。

「長いこと冷水に脚をつけていては冷えるぞ。さつさと水から出たらどうだ」

ミアの反応を楽しんでいるらしい男に、ムツとした。どうせ一度見られたのだからと諦め、ミアはざばりと噴水から脚を出し豪快にぶんぶん振った。その様子に、男が目を丸くする。

「大胆な娘だな。そんなに無防備に脚をさらけ出して俺を誘って——いるわけでもなさそうだな。お前からはまったく色気を感じない」

「わ、悪かったわね！」

初対面だというのに不躰^{ぶてい}な男だと思いつつ、事実なのでどうしようもない。

ちよつと脚を冷やそうだななんて、考えなければよかった。噴水の縁に腰掛け手で水面に触れるくらいなら優雅に見えるかもしれないが、スカートをたくし上げて脚を入れていたとなると話が違う。子供か、と情けなくて泣きたくなる。

しかもここは他国の王家所有の庭で、ミアは立ち入る許可すらもらっていないのだ。どうかこの男が国王と通じている者でありませぬようにと、ひそかに祈る。

「見慣れない服を着ているな。お前、異国から来た娘か？」

男がしげしげとミアを眺め尋ねてきた。まさか王妃候補として城を訪れた客とは思ってもいないのだろう。さきほどは簡素なドレスのせいで使用人と間違えられてしまったが、今はこの格好を心底ありがたいと思った。

「ええと、そう……です。長旅で脚がひどく疲れていたもので、少し冷やしたくて……王家所有の庭へ勝手に立ち入ってしまい申し訳ありませんでした」

神妙に頭を下げながら、ミアは腕にはめていた国の紋章が入った腕輪をさり気なく隠した。自分を証明できる物はこれだけだ。こんな遠目で相手がステイリンの紋章を判別できるとは思わなかったが、万が一ということもある。幸い男はミアの言葉を信じたのか、再びベンチにごろんと横になった。

「さしあたりお前は、王妃候補としてこの城に集められた女たちの侍女といったところか。……王は妻を娶^{めと}る気などないというのに、ご苦労なことだ」

そう言うって臉を閉じた男とは逆に、ミアは目を大きく見開いた。

「え……妻を娶^{めと}る気がないって、国王様は結婚する気がないってこと？」

驚きのあまり、口調がだいぶくだけてしまった。男は臉^{まへ}を薄く開き、ちらりと横目でミアを見る。

「まあ、そういうことだな。王は今のところ、王妃を迎えるつもりも結婚する気もない」
 気怠^{けだる}そうにベンチに寝そべる男の身なりは、距離があってもかなり上質だとわかる。
 もしかしたら王に近い家臣かもしれない。それだけに、男の言葉を聞いたミアに動揺が
 走った。

「そ、それじゃあ……ブライルの国王は王妃を迎える気もないのに、王妃候補にしてやるだのなんだの騙^{だま}してあちこちの女性に文書を送ってるってわけ？」

「……ひどい言いようだな」

「だってそういうことじゃない！」

ミアが長期間馬車に揺られブライルにやってきたのは、王妃になるためだ。なのに、
 当の国王にその意思がないなんてまったくの無駄足ではないか。

ラウレンスに「国王を落としてみせる」と啖^{たんか}呵をきったものの、本当のところ自信な
 どなかった。広間に集^じうたくさんの美しい令嬢たちを目にした時は、さらに心がくじけ
 そうになった。

それでも頑張らなきゃいけないと張っていた糸が、ぶつんと切れてしまった。

「人を馬鹿にするにもほどがあるわ。これだけの大国の王ともなると、暇つぶしも桁違^{けた}
 いなのね」

大国の王に対して不敬なのはわかっている、止まらなかった。

嫌悪に溢^{あふ}れたミアの口調に、男がムツとした表情で起き上がる。

「王はその気がないとやっているのに、家臣たちが勝手にやっていることだ」

「へえ。それなら国王には、そんな意味のないことをしている家臣を止める力もないと
 いうことね」

「意味があるかどうか、お前にはわからないだろう」

「あなたこそ、ここに集められた女性たちの気持ちなんてわからないでしょう！」

怒りに満ちた声でそう言うと、男がベンチから立ち上がりミアの方へ歩いてきた。

自国の王を悪く言われて、気分を害したのだろう。そう察しはついたが、こっちだっ
 て無駄足を踏まされた怒りは収まらない。近づいてきた男を鋭い目で見上げると、男は
 ミアに手を伸ばし顎^{あご}をぐいと持ち上げた。

「随分な言いぐさだな。……お前、どこの国の者だ」

一瞬言葉に詰まったが、名前を聞かれたわけではない。ミアは顎^{あご}を掴^{つか}まれながらも、
 怯むことなく男の目を真っ直ぐに見据えて言った。

「私は、ステイリーン国の者よ」

「ステイリーン？ 遙^{はる}か西の小国か。よくもまあ、あんな離れた国からノコノコと」

男はふんと鼻で笑うと、挑戦的な目つきでミアへ顔を近づけた。
 「お前がそうやって憤るのは主への忠誠心か？ お前の主とて、甘い話にホイホイ飛びつく尻軽女じゃないか」

「な……っ、なんですって!？」

「この国のやり方を否定するが、お前の主だって王妃の座を求めてわざわざブライルまでやってきたのだろう。書簡の内容を疑いもせず、王妃になれるかもしれないと甘い期待を抱いて。そんな主につき合わされたお前も気の毒だな」

ブチンと、ミアの頭の中で何かが切れた。

「……悪かったわね、尻軽女で」

「お前のことを批判したわけではない。お前の主が……」

「ステイリーン国第五王女、ミア・ステイリーンは私よ」

ミアは精一杯威厳を込めて名乗る。男の手を勢いよく振りほどくと、はずみで隠していた腕輪が露わになった。

「裕福なこの国にいるあなたには、わからないのよ。我が国は農作物は思うように取れず、軍隊は名ばかりで弱小、目立った産業だつてないわ。でもね、そんな国にだつて守るべき民がいるのよ!」

四人の姉たちは全員、政略のため近隣諸国へ嫁いでいった。それが王族の務めだと、国のために女ができるのはこれくらいだと、気丈に振る舞っていた姉たちの姿が脳裏に浮かぶ。ジロン伯爵に嫁ぐのを拒み、悪あがきをしているミアにこんなことを言う資格はないかもしれないが、それでもこの男の批判は許せなかった。

「男子であれば、政治にも関わられるでしょう。でも女はそうはいかないわ。王族として国のためにより良い相手に嫁ごうと考えるのはそんなにおかしなこと？ それを、頭ごなしにバカにされるいわれはないわよ!」

目の前の男の表情が、固まる。

「お、前……本当に王女だというのか？ その格好で?」

「悪かったわね! 長旅なんだから、少しでも楽な格好しないと疲れちゃうでしょう。そうでなくたって、謁見まで何時間待たされるかわからないんだから! ご心配いただかなくても、この格好で国王に謁見するほど常識知らずじゃありません」

ミアはすっかり乾いた脚を靴下も履かずにブーツの中に入っ込んだ。そして、背筋を伸ばして男の正面に立った。

「国の利となる相手に嫁ごうとするのは、王族なら当たり前のことよ。集められた令嬢たちだって、それぞれの覚悟のもとここに来ているかもしれない。一方的に非難された

くはないわ。そもそも、期待させるような書簡を送ってよこしたのはプライルの方じゃない。あなたの言い方だと、それに騙された方が悪いという理屈になるわ」

「そういう話ではないだろう」

「少なくとも、私にはそう聞こえたわ。あなたがそのつもりじゃなくてもね」

腹立たしさは消えないが、鬱憤を全て口にしたことで幾分怒りは和らいだ。ミアは深く息を吐き出すと足下に目を落とした。

「ここに来ている全員がそうだとはいわないけれど、国の事情を抱えて来ている者だっているのよ。その重さを知りもせずに、女性を軽視するのはやめて」

「軽く見ているつもりはなかったが……そう聞こえたとしたら、お前も悪いぞ」

「どうして私が悪いのよ」

唇を尖らせて男を見上げると、彼もまた不服そうにミアを見下ろしている。

「お前が、王のことを悪く言ったからだ」

「……素晴らしい忠誠心ね」

男の言動は、家臣としては当然かもしれない。確かに感情のまま他国の王を責めるなど、淑女としてあるまじき行為であったし失礼でもあった。ミアは一步下がりを、深々と頭を下げた。

「失礼いたしました。つい頭に血が上ってしまいました。言ったことは私の本心だし取り返しもつかないけれど、少なくともこの国で口にしていいことではなかったと反省しています」

素直に謝ったミアに驚いたのか、男はふーんと何かを考えるように腕組みをした。何か言いたそうに相変わらずジロジロとミアを観察しているが、こちらはもう何も言うことはない。

しよせん、無駄な論争だ。王妃を持つ気のない王に仕える彼と、王妃になるつもりで来ているミアとでは、わかりあえない。さらなる疲労を感じながら、ミアは顔を上げ辺りを見渡した。中庭に足を踏み入れてから、一体どれくらいの時間が経っているだろう。何も言わずに姿を消したミアを、ピアンカが捜し回っているに違いない。

「謁見用のドレスに着替えるための部屋を用意してもらっているんだけど……国王にその気がないのなら、着替えても無駄ね。面倒くさくなってきたわ」

国王を陥落させるつもりでこの国にやってきたが、そもそも肝心の相手にその気がないのなら頑張りようがない。それよりも、ジロン伯爵を王家の墓に入れないよう、次の手を考えた方が時間を無駄にしなくていいのかもしれない。そんなミアを、男は面白そうに眺めた。

「お前、変わっているな。こんなに威勢がよくて面白い女は初めて見たぞ。本当に王女か？」

「失礼ね。五番目だしこんな身なりだけど、王女は王女よ。あなたの周囲には随分とお行儀のよい女性ばかりがそろっているのねえ」

そう言い返すと、男はミアの周りをぐるりと歩いた。なんだか観察でもされているみたいだ。

「王族や貴族の令嬢など、愛想笑いを浮かべてくだらない話しかしなくせに、キラキラした目つきを向けてくる者しか知らん」

至近距離で顔を覗き込まれ、どきどきと胸が跳ねた。つられて、頬がほんのりと熱を持つ。

「あ、あなたこそ……一応私、王女だって名乗ったんだけど。王女とか貴族の令嬢とかには、もっとかしこまった態度で接するものじゃないの？ 私はそういうの全然気にしないけれど、誰かに見られたら叱られてしまうわよ」

ステイリンであれば、王族にこんな口の利き方をしているのがわかったらたちまち不敬罪に問われかねない。それとも、ブライルではそんなことはないのだろうか。

もともと今のミアはとて王女には見えないので、余計な心配かもしれないが。

「ああ、心配は無用だ。この国で俺に意見できる者は、ごく限られているからな」

「へえ。あなた随分偉い人なのね」

「なんせ俺はこの国を治めているからな」

自信満々な男の態度に、ミアは首を傾げた。逆に男は、口元にニヤニヤとした笑みを浮かべて楽しそうにミアを見下ろしている。

「えっと……それって、どういう意味？」

「わからないか？」

男は妖しげな含み笑いをしたかと思うと、大きな手でミアの頭をガシガシと撫でた。

「ちよっと、何!？」

「着飾るのは無駄ではないかもしれないぞ。俺は、こうまで悪態をついた女が自分のために美しく装うのを見てみたい」

「あ、あなた……もしかして……っ！」

サーッと顔から血の気が引き、背中を冷たい汗が伝う。ミアの青ざめた表情を見て、男はニイッと不敵な笑みを浮かべた。

「俺はブライルの王、アイデン・ブライルだ。いけ好かない最低な男のために、精一杯着飾るがいい」

高らかに言い放つと、アイデンは踵を返して中庭から去っていった。

「え、ちよつ、もつと早くそれを言いなさいよ……っ！」
 最悪過ぎて泣けてくる。ミアは力なくその場にへたり込み、がっくりと項垂れたのだった。

「まったくもう……ミア様は、我慢が足りません！」

案内された客間で、ミアはぎゅうぎゅうと締め付けられるコルセットのキツさに無言で耐えていた。ミアの支度をしてくれているピアンカは、ひどくご立腹だ。

「ここから動かないでくださいって言ったのに、勝手にフラフラと徘徊して……お庭でうづくまるミア様を見つけた時は、本当に心臓が凍る思いでしたよ」

ピアンカが話すことにギリギリとコルセットが締め上げられる。

いつもなら「もつと緩くして」とか「そこまで締め付ける必要はない」とお願いをするところだが、今回ばかりは何も言えない。

「具合でも悪くなったのかと思いきや……あるうことか、ブライル国王に暴言を吐きまくったなんて。もう、本当にもう！」

「……ごめんなさい、ピアンカ」

反論の余地もない。絶対王妃になる、国王を落としてみせると啖呵を切ってブライル

国に来たというのに、この失態には目も当てられない。今すぐ尻尾を丸めてここから逃げ出したかった。

はあ、とため息を吐き項垂れるミアに、ピアンカはキツと鋭い視線を向ける。

「落ち込んでいてはだめですよ。万が一という可能性もあるじゃないですか」

「万が一って何？ もしかして、あの男が私を気に入ったとかそういう……」

「違います。ミア様が会った男が、本当は国王陛下じゃなかったって方です。からかっていたとか、面白がつて王を名乗った可能性もありますでしょ」

ああ、そつちね、と眩くとさらにコルセットが締まった。

「もしだめだったら、ミア様はあのエロジジイ伯爵に嫁がないといけないんですよ？ 私はミア様に一生お仕えするとお約束した身。もちろん伯爵のお屋敷にもついていくつもりでおりますが、あのジジイ……もとい、伯爵とミア様が——と思うと胃がキリキリしてまいります」

「その前に、私の胃がつぶれちゃうわよ！ お願だから、もうちよつと緩く……」

息も絶え絶えにお願いするとほんの少しだけコルセットは緩んだが、それでも普段の倍は苦しい。

「言い過ぎたとは思ってるわよ。でも、許せなかったんだもの。王妃候補を集めておき

ながら、肝心の王が結婚する気はないと言うのよ？ 失礼すぎるわ」
「だからって、それをそのまま口にしたミア様にも落ち度はあります！」

ミアががけつぶちの状況なのを一番理解しているのはミアンカだ。だからこそ、ミアも胸が痛い。たった一人、付き人としてこんな遠い異国までついてきてくれたのに、ミアの暴言のせいで、全て無駄にしてしまうかもしれないのだ。

「まあ……できるだけのことはするわよ。先のことはそれから考えましょう」

落ち込んでなんていられない。明るく言って顔を上げると、ミアンカもミアに微笑みかけてくれた。

「ミア様……そうですね。私は腕によりをかけて、さつき広間にいた女性たちの誰よりもミア様を可愛くしてさしあげます！」

こうして傍にいてくれるミアンカが、心底頼もしい。

（しっかりとしなきゃ！ そうじゃなきゃ……あの男が言ってたように、こんな遠くまでついてきてくれたミアンカに申し訳ないわ）

念入りに支度を整えた後、呼びに来た案内役の使用人に先導されながらミアは再びさきほど足を踏み入れた大広間に戻った。

ミアとミアンカが姿を現した途端、にこやかに談笑していた令嬢たちがぴたりと口を

つぐんだ。

「ちよっと、あれってさきほどの……」

「嘘、王妃候補だったわけ？」

ひそひそと囁く言葉が耳に入ってくる。呆気にとられたようにこちらを見ている令嬢もいれば、睨みつけてくる令嬢もいる。そんな令嬢たちに辟易していると、案内役の使用人が小声で囁いた。

「すぐに王よりお呼びがかかると思っていますので……申し訳ありませんが、少しだけここでお待ちいただけますか？」

「え？ すぐに？」

これだけたくさんの方が待っているのにどうしてだろうと不思議に思い問いかけると、使用人はさらに声をひそめて続けた。

「陛下から直接のお達しです。ミア様のお仕度が整い次第、謁見の間にお呼びするようにと」

「でも……ここにいらっしゃる方たちは、私よりも前から陛下への謁見をお待ちなんですよね？」

「まあ、それはそうなんですが」

「だったら、順番は守らなくてはいいけないわ。私は大丈夫ですから、どうぞ順番通りに